

Press, Boulder, Colorado, USA. xix + 231 pp. ISBN 0-8133-0758-6 (cloth). ISBN 0-8133-0824-0 (paper). 生物学に関連する哲学を、進合理論、創造説、適応度、自

然選択の単位、適応、分類学、社会生物学等のトピックを取り上げ論じる。 (MM)

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
40(4): 511-514, 1994

横須賀市自然博物館の紹介

横須賀市博物館は、米国提督 M. C. ベリー来航 100 年祭の記念事業として 1954 年 4 月 1 日にベリー来航ゆかりの地である横須賀市久里浜に建設され、最初は「ベリー記念館」として発足した。翌年の 4 月には博物館法にのっとり「ベリー記念館」から「横須賀市博物館」に改称し、公立の総合博物館として登録され横須賀市の教育委員会所属となった。しかし建物は旧海軍工作学校の転用であり、博物館とは性格の異なる横須賀市の体育会館が同じ建物内に併設されており、運営上では本来の博物館的機能を十分に果たすことのできない不便さがあった。とりわけ建物が木造であることから展示や収蔵資料の火災や地震による消失が最も心配されていた。古い運営記録をみると、1959 年 2 月には「市域の中心部に移転・新築する新博物館の構想案」が作成され、予算案とともに教育委員会に提出されている。現在ある「横須賀市自然・人文博物館の機能と目的」の具体的な内容がすでにこの構想案に示されている。当時の日本の博物館界においてこの構想案は、地域博物館の存在形態を進歩的に構築しているものであり、後輩学芸員である私達も誇りにしている。しかしこの構想案が実現するまでには総合博物館としてスタートしてからまだ 17 年間が必要であった。

この久里浜時代は地域博物館としての展示・収集・保管・研究の基本姿勢が築かれ、さらに現在も続いている教育普及や環境保全に関する博物館としての立場を明確にした時代といえる。展示・収集事業は三浦半島の自然と歴史を基本として、これらの情報をさらに特徴づけられる方向性をもって展示展開や収集地域を広げてきた。現在まで引き継がれている収集・研究活動の基盤は、初代館長である羽根田彌太博士（医学博士；日本魚類学会名誉会員）の大きな業績のひとつである。羽根田氏はパラオ（現ペラウ共和国）熱帯生物研究所やシンガポール

のラッフルス博物館（湘南博物館時代の館長として）での一貫した発光生物の研究と多くの研究者との交流を通して、研究資料（標本）やその保管の重要性を強く感じておられたようである。また在職中に廻られた世界各国の研究所や博物館の運営・展示を通して新しい横須賀市博物館像を考えられていたことが、当時の出版物である「博物館雑報」に記述されており、職員をはじめ教育委員会への啓蒙も熱心にされていた。羽根田氏のシンガポール時代からの友人である英国人の E. J. H. コーナー博士（Dr. E. J. H. Corner; 元シンガポール植物園長で 1985 年の第 1 回日本国際生物学賞の授賞者）の来館時の提言により、博物館が管理・運営をする付属の自然教育園の設立構想が進化した。馬堀自然教育園（1959 年 4 月開設：面積 3.8 ha の林地）に続く天神島臨海自然教育園（1966 年 4 月開設：保護海域を含め面積 54 ha）がそれで、博物館活動のなかに「自然環境を永遠に後生に残すとともに、その地域を学術研究や青少年の学習の場とし、自然を荒らさず学習する態度を養う」という理念を生かした活動のできる付属施設である。現在も博物館の教育や研究活動には欠かせないフィールドであり、「天神島臨海自然教育園」では魚類や他の海洋生物の生態学的研究の場として活用され、また横須賀市民の貴重な自然財産にもなっている。

教育活動のひとつとして位置づけた「講演会」の当時の講師陣をみると故人となられたが田中茂穂・岡田要・岡田彌一郎・大島正満・高槻俊一・楡山義夫・川本信之・安田富士郎・酒井恒博から水産生物学に造詣の深い方々が多く、当時学生だった筆者もいくつかの講演会に参加した記憶がある。羽根田氏の研究分野である発光生物はバクテリア・菌類・昆虫類・魚類・浮遊生物・海産無脊椎動物などの多岐にわたる分類群に及び、多くの研究者との交流があった証といえる。この羽根田氏の世界的な発光生物の収集資料（1969 年に横須賀市博物館に寄贈）と研究成果は、世界に誇れる博物館の貴重な財産であり、現在も展示室の 1 コーナーで紹介している。このような経過から当時の博物館としては展示ばかりで

なく調査や研究にもかなり重きを置いた施設であったし、自然部門の収集資料としては水産生物に重点が置かれていたといつてよい。一方総合博物館としての性格から自然部門では植物や古生物資料が、人文部門では考古や有形民俗資料が多く収集されはじめ、懸案であった新築移転が急務となった。横須賀市の中央である現在の地に博物館の自然科学部門が建設（1970年10月開館；延面積2782m²）され、さらに人文科学部門が併設（1983年6月開館；延面積5379m²）されて一体化した総合博物館になるまでには、久里浜時代の新館構想から24年目であった。名称は「横須賀市自然・人文博物館」に変わり、職員数も16名（学芸員は自然・人文部門各4名）に増員された。現在の自然博物館の学芸員は地学・古生物、植物、昆虫、脊椎動物（主として魚類）の各部門各1名である。

横須賀市自然博物館の液浸資料専用の収蔵室（第1資料室）面積は50.1m²で決して広くはなく、主に魚類標本を保管している。換気は送風と排気と除湿が可能で、標本収納棚はスチール材のものを使用している。第1資料室では模式標本類と150cc-3000ccまでの標本瓶に収容できる標本類の保管が主体で、大型標本類は地階にある収蔵室でコンテナ型収容器に保管している。またサメ・エイ類など全長1mを超える大型標本類は、博物館の外側から収納管理できる特別大型液浸資料室（延面積11m²）のプール槽（1.5×5×1.5m）に保管し、おもな標本としてはミツクリザメ・ラブカ・チョウザメ・サケガシラ・アマシイラなどがある。保存液はホルマリン水溶液が大部分であるが、第1資料室のものは全体の70%がこの10年間で70%エタノールと交換した。現在までの登録標本件数は約30000であるが、採集日・場所・種類が同一の場合は複数個体以上であっても登録は1件となるので、実際の標本の所蔵点数は膨大なものとなっている。自然博物館に移転直後はまだ魚類標本といっても羽根田氏のコレクションである発光魚（発光器官をもつ魚類の総称）と内外各地の魚市場で採集した深海性魚類が大部分で、浅海性魚類や特に淡水魚類は皆無に等しい状態であった。従って移転直後から10年計画での淡水や浅海性魚類の収集計画をたて、北海道から沖縄諸島までの河川と近隣の浅海域で調査を実施した。また三浦半島の沿岸域の特性を明らかにする目的で、伊豆半島と房総半島を含めた相模湾と東京湾の調査と資料収集にその後10年を費やした。この20年間の調査結果と採集資料の中から未記載種や未記録種を内外の研究者の協力を得て報告できたこと、また凶鑑類を通して広く魚類に興味をもつ人達に紹介できたことは自然博物館の業績のひとつ

つにあげてよいと思う。これらの収集計画の中でとりわけハゼ科魚類については意欲的に行っており、収蔵種数や点数も他の研究機関と比較して特色あるものとなっている。標本写真や生態写真などの二次資料と対応させながら保存しているので、今後も多くの利用者の連絡を待つこととしたい。

収蔵魚類資料の中でまとまった幾つかの寄贈コレクションを紹介する。

青柳コレクション

故青柳兵司博士（1912-1971）が戦前に琉球列島で採集した珊瑚礁魚類が中心で、青柳氏の学位論文に記載されているスズメダイ科魚類の他タナバタウオ科・イタチウオ科・テンジクダイ科に属する完・副模式標本をふくむ約500点からなる貴重な資料。ご自宅での仮整理の段階で、すでに保存状態の悪かったものが数多かったのが残念でならないが現在整理を急いでいる。内外からの問い合わせの多い資料だけに、青柳（旧姓は池田）氏の全発表論文と標本類との照合を行い、1996年の目録刊行を目指している。なおこの寄贈資料の中でテンジクダイ科魚類目録については、模式標本類を含めて林（1979）が報告した。

道津コレクション

1989年に長崎大学を退官された道津喜衛博士の寄贈標本類で、対馬・五島列島・男女群島や有明海の調査資料と、氏の長年にわたるハゼ科魚類の生活史研究に用いた多数の初期発生標本類が中心である。収蔵整理には4年間をかけ昨年末に仮登録が終了し、資料総点数約2000件となった。その中で今後ハゼ科魚類資料については宮内庁生物学御研究所（前赤坂御所魚類研究室）で登録管理が行われる。

羽根田コレクション

前横須賀市博物館長の羽根田彌太博士が1937年から採集された約1000件の発光生物資料である。収集地域は欧米・大洋州を初め東南アジアは広く調査されているので、今となっては国情の関係で入国困難な地域も含まれている。収蔵されている約150種の発光魚については林・大場（1980）が国内産を、望月ほか（1985）が外国産資料目録として報告した。また、氏の発光魚を含めた175編の研究論文業績が、1978年に「横須賀市博物館資料集・第1号」として出版されている。

田祥麟博士（Dr. Jeon, S. R.）コレクション

1983年の日本学術振興会の国際交流計画で来日された大韓民国祥明女子大学の当時副教授をされていた田祥麟博士による、韓国産淡水魚類の寄贈資料である。この標本類は氏が日本各地の大学や研究機関での講演のため

に持参されたもので、まだ新種記載されたばかりの *Squalidus multimaculatus* を含む 104 種約 200 点は日本の淡水魚類研究者の注目を集めた。日本国内の学術参考用に供したいという氏のご希望から一括寄贈を受け、収蔵目録を作成した(君塚・林, 1985)。

桜井コレクション

水中写真家である桜井淳史氏の寄贈資料で、氏の出版になる「野外ハンドブック・10: 魚: 淡水編, 山と溪谷社(1980)」と「世界の熱帯魚, 山と溪谷社(1985)」に掲載した標本写真用の標本類である。日本産淡水魚は約 80 種、世界の熱帯魚は約 22 目 91 科約 500 種に及ぶ資料で、現在研究者の協力を得ながら登録を進めている。市販の出版物に掲載された写真の実物(標本)が、後の研究資料となるような保管のあり方(出来れば一括が望ましい)は他の博物館や研究施設にもお勧めしたい。

博物館の教育活動の一環として位置づけているもの出版事業があり、定期刊行物(年一回発行)としては「横須賀市博物館研究報告(自然科学)」「横須賀市博物館資料集」「横須賀市博物館館報」を毎年印刷している。「研究報告」は 1993 年発行のもので第 41 号となり、博物館の歴史とともに歩んできた学術印刷物で、内外の博物館・研究所・大学などの施設約 700 館(国内 600 館・国外 100 館)と交換をしている。自然博物館の資料や地域に関連する研究テーマを扱った論文や短報であれば外部投稿も受付けているので、編集担当者に相談願いたい。また「資料集」は前記のような特別なコレクションの目録も印刷するが、基本的には整理・登録の完了した資料の中で「目」または「科」単位の分類群での目録化を進めている。ただしこの目録化の作業は膨大な手間と時間がかかり、毎年の収集スピードと同定作業の間に大ギャップが生じている。このギャップの解決策のひとつとして登録資料の「CPU によるデータベース化」を開始したが、魚類担当の学芸員 1 人の悲しさゆえなかなか捗らない。この会員通信を読まれた方で「協力したいなー!」という気持ちを持たれた方は是非筆者に一報いただきたい。

資料 1. 横須賀市自然博物館に保管されている模式標本類(青柳コレクション中の模式標本類は現在整理中なので、1996 年出版予定の資料目録に載せる)

- Mochizuki, K. and M. Hayashi. 1989. Revision of the leiognathid fishes of the genus *Secutor*, with two new species. Sci. Rept. Yokosuka City Mus., (37): 83-95.
3. フタスジイシモチ *Apogon fukuii* Hayashi: YCM-P9539.
Hayashi, M. 1990. Two new cardinalfish (Apogonidae: genus *Apogon*) from the Indo-west Pacific. Sci. Rept. Yokosuka City Mus., (38): 7-18.
4. ムナホシイシモチ *Apogon chenii* Hayashi: YCM-P25101.
Hayashi, M. 1990. Two new cardinalfish (Apogonidae: genus *Apogon*) from the Indo-west Pacific. Sci. Rept. Yokosuka City Mus., (38): 7-18.

副模式標本 (Paratype)

1. ベニツケギンボ *Dietyosoma rubrimaculata* Yatsu, Yasuda et Taki: YCM-P3251-2-3, 3378.
Yatsu, A., Yasuda, F. and Y. Taki. 1978. A new Stichaeid fish, *Dietyosoma rubrimaculata* from Japan, with notes on the geographic dimorphism in *Dietyosoma burgeri*. Japan. J. Ichthyol., 25: 40-50.
2. カエルハゼ *Seiyoopis leprurus* Sakai et Nakamura: YCM-P3976-1-6, 4089-1-10.
Sakai, H. and M. Nakamura. 1979. Two new species of freshwater gobies (Gobiidae: Sicydiaphiinae) from Ishigaki Island, Japan. Japan. J. Ichthyol., 26: 43-54.
3. ヒメスイ *Vellitor minutus* Iwata: YCM-P10010, 10011, 10012, 10013.
Iwata, A. 1983. A revision of the cottid fish genus *Vellitor*. Japan. J. Ichthyol., 30: 1-9.
4. クロオビハゼ *Myersina nigrivirgata* Akihito et Meguro 1983: YCM-P7485.
記載文献は完模式標本に同じ。
5. ミナミイソハゼ *Eviota japonica* Jewwet et Lächner: YCM-P1459, 2615, 2841.
Jewwet, S. L. and A. Lächner. 1983. Seven new species of the Indo-Pacific genus *Eviota* (Pisces: Gobiidae). Proc. Biol. Soc. Wash., 96: 780-806.
6. キビレミシマ *Uranoscopus flavipinnis* Kishimoto: YCM-P8021.
Kishimoto, H. 1987. A new stargazer, *Uranoscopus flavipinnis*, from Japan and Taiwan with redescription and neotype designation of *U. japonicus*. Japan. J. Ichthyol., 34: 1-14.
7. *Secutor hanedai* Mochizuki et Hayashi 1989: YCM-HLP180-2, 213-2.
記載文献は完模式標本に同じ。
8. *Secutor megalolepis* Mochizuki et Hayashi 1989: YCM-HLP179, 214-2, 217.
記載文献は完模式標本に同じ。
9. ナガレボシ *Apogon selas* Randall et Hayashi: YCM-P10231.
Randall, J. E. and M. Hayashi. 1990. *Apogon selas*, a new cardinalfish from the western Pacific. Japan. J. Ichthyol., 36: 399-403.
10. フタスジイシモチ *Apogon fukuii* Hayashi 1990: YCM-P6504, 25102.
記載文献は完模式標本に同じ。

完模式標本 (Holotype)

1. クロオビハゼ *Myersina nigrivirgata* Akihito et Meguro: YCM-P7592.
Prince Akihito and K. Meguro. 1983. *Myersina nigrivirgata*, a new species of goby from Okinawa Prefecture in Japan. Japan. J. Ichthyol., 29: 343-348.
2. *Secutor hanedai* Mochizuki et Hayashi: YCM-HLP180-1.

引用文献

林 公義. 1979. 横須賀市博物館所蔵魚類資料目録 (I): (APOGONIDAE・テンジクダイ科). 横須賀市博物館資料集, (4): 1-16, pls. 1-2.

- 林 公義・大場信義. 1980. 横須賀市博物館所蔵発光生物資料目録 (I): (昆虫綱・軟骨, 硬骨魚綱). 横須賀市博物館資料集, (5): 1-26, pls. 1-14.
- 君塚芳輝・林 公義. 1985. 横須賀市博物館所蔵魚類資料目録 (II): (田祥麟博士寄贈韓国産淡水魚類). 横須賀市博物館資料集, (9): 31-42.
- 望月賢二・藍澤正宏・林 公義. 1985. 横須賀市博物館所蔵発光生物資料目録 (II): (軟骨, 硬骨魚綱). 横須賀市博物館資料集, (9): 1-15, pls. 1-14.
- (林 公義 Masayoshi Hayashi)

大会は Bangkok を代表する最高級ホテル, Central Plaza Hotel の2会場を1週間に渡り貸切って行われた. 研究発表に先だて行われたオープニング・セレモニーでは, 大会運営委員長の Supap Monkolprasit 教授から“タイにおける分類学の現状”, 上野輝彌博士から“第三紀北西太平洋における魚類進化”および John E. Randall 博士から“珊瑚礁性魚類”についてそれぞれ特別講演を受けた (Fig. 2). 研究発表ではポスター・プレゼンテーションが16, 口頭発表が以下のとおり5つのセッションに分かれての143あった.

魚類学雑誌
40(4): 514-515, 1994

第4回インド洋・太平洋魚類国際会議参加報告
Report on the 4th Indo-Pacific Fish Conference in
Bangkok, November 28-December 4, 1993



Fig. 1. Logo for Fourth Indo-Pacific Fish Conference, 1993, in Bangkok.

インド洋・太平洋魚類国際会議は文字どおり, インド洋および太平洋域に分布する魚類のあらゆる分野について論議・発表する国際学会である. 本会は4年に1度開催されるもので, 過去には1985年に第2回大会が東京で開催されている. 昨秋 Bangkok で開催された第4回大会へは, 37ヶ国, 約200名の参加があった. このうち, ホスト国のタイは32名. もっとも数が多かったのは日本で, nominal entry だけでも46名の参加があり, 随行者や行政関係者も含めると60名を越えたものと思われる. 会場は日本語であふれ, さながら“日本魚類学会 Bangkok 秋季大会”の感があった.



Fig. 2. Special address on “Studies on fish taxonomy of Thailand” by Prof. Supap Monkolprasit at the conference opening ceremony, on 29 November 1993.

- セッション 1A: 繁殖生物学・遺伝学
- 1B: 一般講演発表
- セッション 2A: ハゼ類の系統, 行動および進化
- 2B: 珊瑚礁, 汽水域およびマングローブ域における系統, 行動および生物学
- セッション 3A: 淡水魚の系統, 生物学および生物地理
- 3B: 仔稚魚の生態, 行動および進化
- セッション 4A: 軟骨魚類の系統, 生物学および進化
- 4B: 深海魚の系統, 進化および生物地理
- セッション 5A: 板鰓類の保全
- 5B: 追加発表

大会運営は, スライドプロジェクターの故障による中断・遅延を除けば支障なく進められた. なか日の12月1日には half/one day tour が企画され, 魚市場, 王宮, 田園地帯への見学が実施された. その国の魚類相の概要を

知るには、魚市場を訪れるのが魚類学者の常道である。Bangkok 市内の魚市場は種類数が少ないうえに概して塩干物が多く、標本収集には不向きであった。それに対して、half day tour で訪れた Samut Fish Market はタイ湾に面しているの、さまざまな海産魚が鮮魚で得られ、あちこちで“新種だ！”という日本語が飛びかっていた。最終日の farewell party は、タイの民族舞踊に大会参加者も加わるなど、なごやかな雰囲気なかですすめられ、次回、New Caledonia で開催される第5回大会での再会を約束し締めくくられた。最後に、第4回大会の運営を昼夜をいとわず支えてくれた、Monkolprasit 教授をはじめとする、カセツァート大学、チュラロンコン大学、タイ水産局などの現地スタッフに感謝の意を表し、大会参加の報告に代えたい。

(細谷和海 Kazumi Hosoya)

魚類学雑誌
40(4): 515, 1994

『進化学研究会』の紹介

ダーウィンの進化“論”はいち早く受け入れた日本ですが、進化“学”の方はいまだに科学の一分科としての地位を認められていないようです。進化の不可知論を堂々と唱える研究者も依然としていますし、我が国の大学で進化の名を冠した講座があるという話はいきり聞きません。ようやく最近になって『進化学』という言葉が普及し始めましたが、それは分子の言葉で進化が語られ始めたからでしょうか。

こうした中で3年前に発足したのが今回紹介する『進化学研究会』です。以前、Network in Evolutionary Biology という研究会がありましたが、中心となる人物がいなくなり現在は自然休会となっています。ですから、今のところ『進化学研究会』が進化学を対象とした我が国唯一の本格的な研究会といえると思います。

現在、『進化学研究会』の活動の中心はニューズレター“SHINKA”の発行となっています。発足した当時は、世話人の斎藤成也さんを中心に研究会を東京で随時開催していましたが、会員が全国規模になるにつれてその回数が減ってきました。その一方で、ニューズレターの量と内容が飛躍的に充実してきました。昨年発行された第3巻では総ページ数がなんと200ページを超えています。ニューズレターの内容は会員の皆さんからの研究情報や

図書紹介が中心です。ちなみに第3巻3号は次のような構成になっています。

- 第1回 SMBE (Society for Molecular Biology and Evolution) 年会の参加記
- 国際植物科学会議の参加記
- 研究室の紹介 (金沢大学理学部生物学科植物自然史講座)
- 多重アラインメントソフト Clustal V 使用実践編
- 分子進化遺伝学の研究支援コンピュータプログラム MEGA の紹介
- 図書紹介『系統分類学入門—分岐分類の基礎と応用—』
- 『かたち』を測る: 形態測定学フォーラムの紹介

本研究会の特色は、なんといっても日本語で進化学の最先端の情報を知ることができることでしょうか。世話役をはじめとして、中心となっている人たちは分子進化学、あるいは分子進化遺伝学の研究者です。皆さんご承知のように、これらの分野は日本人研究者が世界の最先端をいっている数少ない分野の一つです。ですから当然のことながら入ってくる情報も賞味期限切れのものはありませんし、国際的かつ一流のものばかりです。魚類学会会員の皆さんで本研究会に入会されている方はまだほんの数名ですので、進化学の最先端の情報に触れたい方がおられましたら、是非入会されることをお勧めいたします。

入会方法は次のとおりです。下記宛てに、1) 申し込み年月日、2) 氏名(ふりがな)、3) ニューズレターの発送先住所・電話番号(なるべく所属機関宛て)、4) 『進化学研究会』を知ったきっかけ(紹介者など)、5) 自己紹介(ニューズレターの『新入会員の紹介』に掲載される)を記載した申込書を郵便または FAX で送り、郵便振込口座『東京 7-148519 進化学研究会』宛てに年会費 1,000 円を振り込んでください。申し込みおよび会費の入金があり次第、ニューズレター SHINKA が送られてきます。

記

進化学研究会世話人: 斎藤成也
〒411 静岡県三島市谷田 1111
国立遺伝学研究所 進化遺伝研究部門
TEL (0559) 75-0771 FAX (0559) 75-6040
電子メール nsaitou@genes.nig.ac.jp
(宮 正樹 Masaki Miya)